

こだわりの帽子 気軽にオーダー

大須・メーカー直営店好調



名古屋・大須に昨年10月末、市内の帽子メーカーが初の直営店をオープンさせた。格安の輸入品や他業種からの参入で「じり貧」と言われる帽子業界で生き残るためだ。メーカー直営だけに、きめ細かいオーダーに対応できるのが強み。本物へのこだわりがファンの支持を受け、好調な滑り出しをみせている。

シンプルな内装のこぢんまりした店内に、さまざまな種類の帽子が並ぶ。若者でにぎわう大須商店街の外れ、大須通り沿いにある帽子専門店「HATBLOCK」。帽子の木型という意味の名に、「原点にこだわる」店の姿勢が表れる。

大正創業の中堅帽子メーカー「山鶴」（名古屋市中熱田区）の山田英之社長（47）が、ある思いを込めてオープンさせた。これまではスーパードブランドからの依頼を受けて製品を作る「日陰の仕事」が中心だった。それが従業員、特に若手のやる気をそぎ、受け身にさせてしまっていたと、山田さんは感じていた。

職人奮起、値段も手ごろ

んでくれるに違いない」。業界では珍しい直営店の出店先は、最近、東海地方の若者文化の発信地となってきた大須に決めた。

6人いる20代の店員はそれぞれデザイン、裁断、縫製などの仕事をこなす職人の顔も持つ。

店に並ぶ商品のほとんどがオリジナル。布の種類や型、大きさなど、1点1点客の細かい注文に応じることができるといふ。デパートなどで注文すると1カ月かかるところを約2週間ですら上げられる。中間マージンがかからないため、オーダーメイドの割に価格も手ごろだ。若者だけでなく中高年の姿も目立つという。

若手のやる気を引き出す狙いも成功しているようだ。名古屋造形芸術大卒の野垣直果さん（23）は「自分が裁断し、仲間が縫製して帽子ができあがっていく過程を見ているだけに、お客さんが喜んでくれた時のうれしさは格別です」と満足そうだ。

若者の間で帽子がちよっとしたブームといわれる。だが、山田さんには、流行を意識しすぎたバラエティー志向の強い帽子はかりが目につく。「『たかが帽子、されど帽子』。私たちは定番にこだわる本物志向で、リピーターが大勢来る店に育てていきたい」と話している。

店員の野垣さん（左）に売れ行きを聞く山田さん（右）名古屋市中区大須3丁目